

絶てのほるものなればさのみやはみさほも作りあへむねんじ侘つ、様々の寶物かたはしより捨るがごとくすれども更に目みたつる人もなし。たまくかふるものは、金を軽くし粟を重くす、乞食道の邊におほく、愁悲しう聲耳にみでり、前の年かくのごとくからくして暮ぬ、明年はたちなをるべきかと思ふ程に、あまさへえやみ打そひて、まさる様に跡かたなし、世の人みな飢死ければ、日をへつ、きはまり行さま、少水の魚のたとへに叶へり、はてには笠うちき足ひきつ、み身よろしき姿したる者、ひたすら家ごとに乞ひありく、かくわびしれたる者どもありかと見れば、則たふれふしぬついひちのつら路の頭に飢死ぬる類ひはかすもしらず、とりするわざもなければ、くさき香世界にみちくして、かはり行かたち有さま、目もあてられぬ事おほかりいはむや川原などには馬車の行ちがふみちだにもなし、あやしきゑづ山がつも力つきて、薪さへともしくなりゆけばたのむかたなき人は、みづから家をこぼちて、市に出てこれをうるに、一人が持て出たるあたひなを一日が命をさ、ふるにだに及ばずとぞ、あやしき事はかる薪の中につき、白かねこがねのはくなど所々につきて、みゆる木のわれあひまじれり、是を尋ねればすべき方なきもの、古寺に至りて佛をぬすみ堂の物の具をやぶり取て、わりくだけるなり、濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うきわざをなむ見侍りし、又いとあはれる事侍りき、さりがたき女男など持てる者は其思ひまさりて、ゑほそきはかならずさきだちて死ぬ其故は我身をば次になして、男にもあれ女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たまく乞得たる物を先ゆづるによりて也去ば親子ある者は定まれるならひにて、親をさき立て死にける、父母があま盡てふせるをゑらすして、いとけなき子のその乳房にすひつきつ、ふせるなども有けり、仁和寺に慈尊院の大藏卿隆曉法印といふ人、かくじつ、數ゑらすしぬる事をかなしみて、聖をあまたかたらひつ、その首のみゆるごとに、額に阿字を書いて、縁を結ばしむるわざをなむせられけ